

自動車に

カラスがとまって

「カー」と鳴く (おーくま)

五二は

二五からは

範囲外 (おーくま)

車窓より ピンクの桜 見事です (心)

藤の花 下がる姿が 奥ゆかし (心)

次々と

國中延びる

新感染 (おーくま)

フワフワと

歩く姿は

ラフラフだ (おーくま)

助手席に 誰も乗せない 二〇年

(おーくま)

あきらめを 知って大人になる 少年

(おーくま)

地元の人 九六回

(地元の人：A アナウンス：B)

B「会社の帰り道、すでに馴染んでしまった赤提灯の暖簾をくぐったときです、不意に馴染めぬ感覚に囚われました、最初何か変だなと思いましたが、心理を虫に喰われたような異和感です、ビールを頼みカウンターに腰かけようとしても馴れない感覚で落ち着きません、調子が悪い、その程度に考えていました、何か変であり席を立ててもう一度暖簾をくぐりなおしてみました、初めての経験でしたからさして重要には考えなかった、気まぐれな心理のせいだろうと、ですが次第に気づき始めます、体内の様子が変である、ビールの器を握りしめ一口すすったあと心理の異変に気づいたのです、他人に気づられるわけにはいかない、黙る事しかできません、経験したことのない気分でした、悪癖なのでしょつか、外で飲むことは、一度寄ってしまうと次の日の晩も寄りたくなる、その次の日の晩も、そして延々と続くのです、酒を飲まなければやり切れない、では酒を飲めば何が残るでしょう、では外で酒を飲まなければ…悪い考えが浮かびます、外で飲むことが出来たのは誰かと契約を結ぶことでしたか、それもすでに…私は容易には気づきません、ただ器を握りしめていました、思想とはいくつかのこみを拾

うことだ、何の脈絡もなくそんな言葉が脳裏に浮かぶ、空白はどんどん体内の中に広がっていきます、無意味な感覚であったかもしれません、ですがいずれば向かい合わなければならぬ心理であったかもしれません、それが酒の席に偶然居合わせただけかもしれない、いえ、無意味を知らなければならなかった、四〇の年を越えられるかどうか、若さだけでは乗り切れない中年の壁に突き当たったのです、絶望を感じました、ちょっと調子が悪いからと店の人に声をかけて帰りました、そういう時こそ酒を飲むものだと言の一人に声を掛けられました、返事も容易にできません、また来るからとなんとか返事をしました、躊躇はしましたけれど酒を飲んでいる場合ではない、耐えきれない、布団をひろげ横になつてみました、気のせいかもしれない、一晩でもたてば…そのようにも考えてみました、翌日は土曜日で会社は休みです、焦りはあったものの少しは気休めになりました、それも端緒であり発端に過ぎない、空白する心理の恐ろしさは後々知るところでまだ入り口に佇んでいるだけでした、私は怯えるようになり、一晩休んだ翌日も心理は落ちつかない、それどころではない、恐怖の姿を眺めるように私はぼんやりした形のない夢でも見るように幻想を見たのです」(一)